

CERÁMICA NOTE

NO.195



LIXIL
ギャラリー

LIXILギャラリー ガレリアセラミカ
東京都中央区京橋3-6-18 東京建物京橋ビル LIXIL GINZA 2F
〒104-0031 phone 03-5250-6530
CERÁMICA NOTE No.195 制作発行:株式会社LIXIL デザイン:IT IS DESIGN

パライソ 2011
W8×D3×H5cm

パライソ 2010
W12×D12.5×H5cm

表紙:パライソ 2010
W7.5×D13×H4.5cm
上:パライソ 2010
(中央)W7×D8×H7cm

Usui Ayumi 薄井歩展
2013年9月2日(月)ー10月1日(火) 10:00a.m.ー6:00p.m. 水曜日休館

—陶パライソ—

雪国金沢にて

—— 薄井さんは金沢美術工芸大学で陶芸を学ばれました。大学を選んだ理由のひとつが雪国に住んでみたかったからだそうですね

薄井：私は子どもの頃から雪が大好きで、降ると嬉しくて、授業中ずっと外を見ていたり、夜遅く外に出て雪で遊んで親に怒られたりしていました。真っ白できれいで冷たい雪にずっと触れていたかったんです。

東京出身なので、生活の困難さよりも白くて美しい雪国のイメージがあり、住みたいという憧れがありました。実際に金沢は雪の日が多くて、日常の色彩も全て雪に覆われた白色のモノトーンの世界になります。雪によって急に景色が変わって、全てが白一色に覆い隠されてしまい、ドラマティックでこんなに世の中はきれいだったのかと感動します。吹雪で雪が横なぐりに降り続ける様子も、どんどん降り積もってお布団のような白い塊になる光景も美しく見えます。金沢美大に行って大雪が降った時には、念願の大きな雪像もつくったんですよ。高さが170cmくらいあり、顔がウサギで体が人間、片手を上げたポーズの像と、座っている仏像風の像の2体をつくりました。雪で大きなものをつくるのは土とはまた異なる感覚で、途中で折れたり、崩れたりとなかなか難しいものでした。

—— 陶芸を選ばれたきっかけはありますか

薄井：私は子供の頃からものづくりが好きで、都立芸術高校で油絵を描いていたのですが、選択授業のロクロ体験で器をつくりたときに、日常で使えるものをつくることの楽しさを知りました。陶芸を大学で学びたいと思いましたが、都会では疲れるように感じていたので、雪の降る金沢を選びました。

—— 器制作が目的でしたが、金沢美大ではオブジェをつくる方も少なくないのではないかですか

薄井：そうです、最初の頃の課題で早速オブジェをつくりました。80cm位の大きな歯のかたちのオブジェで、型成形で2点1組の作品をつくりました。成形の段階で、表面に切込みの線をたくさん入れ、白い歯に地模様を表したのが特徴ですね。つくっている時は無我夢中でしたが、出来てみるとなぜこんなに大きなものをつかったのか不思議な感じがしました。

—— 今展の小さな作品「パライソ」シリーズはどのように生まれたのですか

薄井：学部1年生の課題で、5×5cmサイズのタタラ板に何かを押し付けたり引っかいたりして様々なパターンの模様をつくるテストピースを50個位制作したのですが、それがすごく面白かったんです。突つったり、引っかいたり、釉薬で透明感のある「亀甲貫入」技法などにも興味を持ち、細かい



パライソ 2010
W11×D13×H9.5cm

様々な表情をついているうちに、小さな「パライソ シリーズ」に繋がったよう思います。「パライソ シリーズ」は学部2年生の終り頃から、松ぼっくりや木の枝など自然や日常生活の中で見かける小さくて緻密なつくりのものを面白く思うようになり、緻密な模様の入った小さな塊の作品をつくるようになりました。もともと器から制作を始めている自分自身の大きさへの感覚もあると思います。

—— 細密な文様は自然物のディティールがモチーフですか

薄井：私は目が良くて視力が2.0あるんですね。やはりすごく細かいところまで見えている感じがします。葉などを拾ってきて表面のディティールを部分的に写したり、珊瑚や貝を見ることがあるんですが、でも自然のものをそのまま写しても駄目だし、写しきれるものでもないので、自分で生み出した文様を描いていかなくてはならないと思い、このような模様になってきました。

浜辺に、こんなものが落ちていたら

—— どのように制作していますか

薄井：つくり方は石膏型で型合わせをすることもありますが、多くは一個ずつ手びねりでつくりながら、かたちも途中で変えながらつくっています。途中でかたちを変えると歪んだり、時間とともに土が乾いてしまったりと難しいのですが、サイズが小さいせいか失敗することは少ないですね。模様は、土が軟らかいうちに深さ5mmくらいのところにまず彫って、土が少し硬くなったら表面に近い浅い部分を彫ります。くるくる手の中で回しながら進めていますので、掌の中で潰してしまうこともあります、それを直しながらつくっています。乾燥は時間との闘いでもあり、彫れるタイミングは一瞬です。特に夏は土の乾きが早いので大変です。集中して長時間作業した次の日は、緊張のせいで手の筋肉が硬くなりしびれが残るくらいです。

—— 多様な色彩にはどのようなイメージがありますか

薄井：焼き方や土を変えたり、いろんな色があるほうを見ていて楽しいと思っています。よく土とはわからずにレース編と間違えられたり、色々言われたりしますね。

雪が好きなので白色のイメージにもこだわりがあるのですが、九谷焼の白色は私のイメージするものとは少し違います。白過ぎても人工的で自然の色から離れてしまう気がするので、九谷の土は純白ではないので、それが丁度いいと感じています。様々な色合いの「パライソ」をつくりましたが、私は茶系の微妙な色合いが気に入っています。そんな淡い色合いには海岸の砂にまみれている貝を連想される方もいました。金沢にいたときは川や海が近かつたので自転車で行って、貝殻拾いに夢中になったり、砂丘の風紋などもディティールやマチエールのヒントになりました。今は瑞浪に住んでいるので山の中ですが、近くに川があるので、いつでも川へ行けて気持ちがいいですね。



パライソ 2010
W7.5×D9×H3.5cm

—— 「パライソ」は既に200個くらいつくれたそうですが、様々なかたちのものがあるようですね

薄井：かたちについてはわりと丸いかたちが多かったので、丸に棒が生えたうどうだろうかなど展開しています。このかたちは棒の部分の細くて華奢な部分が脆くてすごく難しかったのですが、いつも印象の違うものができたと思います。

—— タイトルの「パライソ」はポルトガル語で天国の意味ですね

薄井：極楽や天国みたいなきれいな場所の、浜辺にこんなものが落ちていたらいいなという思いからつけました。ビーチコマーや石や貝殻を拾うときのように、拾って集めることが楽しくなる、そんなものがつくりたいと思います。そういう楽しいイメージのタイトルを探していて、日本語の「極楽」だと音もちょっと重い感じがしたので、ポルトガル語の「パライソ」の響きがなかなか怪しい感じもあっていいなと思いました。

—— 今後はどのような作品をつくりたいですか

薄井：「パライソ」のシリーズはまだ続けています。でもまたいつか、大きい作品にも挑戦したいと思っています。東京国立博物館や科学博物館の熊や恐竜の骨のような大きなものをよく見に行ったり、剥製もすごく面白いと思って興味があるんですよ。



薄井 歩プロフィール

1987年 東京都調布市生まれ

2006年 東京都立芸術高等学校美術科 卒業

2011年 金沢美術工芸大学工芸科 卒業

2013年 金沢美術工芸大学大学院美術工芸研究科 修了

展覧会

2011年 アジア現代陶芸の交感展（広東石湾陶磁博物館／中国）

薄井歩・百瀬玲亞 二人展－楽境－（カフェ＆ギャラリーmusee／石川）

金沢美術工芸大学卒業制作展（金沢21世紀美術館／石川）

2012年 東アジアの当代陶芸交流展（新北市立鶯歌陶瓷博物館／台湾）

掌中の月展（ギャラリーアルトラ／石川）

個展（カフェ＆ギャラリーmusee／石川）

個展（石川県立伝統産業工芸館／石川）

金沢美術工芸大学修了制作展（金沢21世紀美術館／石川）



パライソ 2011
W5.5×D21×H6cm



パライソ 2012
W11.5×D11×H9.5cm